

『源氏物語』における死と生

吉田真樹

「死と生」（あるいは「死生」という捉え方は、個における生命の発現と消滅の順序をあえて逆倒した形において問題を問おうとする方法的態度であると考える。即ち、死に重点を置き、死から逆算した形において生を限界づけ捉え直してゆこうとする態度である。この態度が、例えば個的な生命に適用されるならば、積極的な死の先取り、死の覚悟のもととの生といった、生命を内的に捉え直す思考の筋道が導かれ得るだろう。また、適用する対象を個的な生命に限定しないのであれば、他者の死のもとにある自己の生、あるいは自己の死のもとにある他者の生といった、生命をいわば間柄的に捉え直す視圈が開けてくるのではないかとも思われる。このように形式的に押さえてみるだけでも、「死と生」という観点が豊かな可能性を含みものであることがわかる。

こうした「死と生」の観点をふまえつつ、『源氏物語』を読み解くことが本稿の課題である。「死と生」という観点と『源氏物語』との親近性については、追々明らかにしてゆくこととして、まずはじめに、本稿で扱う

べき『源氏物語』の範囲を絞り込むことにする。

周知の通り、『源氏物語』は光源氏を主人公とする「正編」と薫を主人公とする「続編」にわけられる。『源氏物語』の思想性を明らかにするためには、まず「正編」が取り扱われるべきだと考える。「正編」は、(大づかみにいえば)光源氏の誕生から死までを描くものであるが、光源氏の一生はそれ自体膨大であり複雑極まるものであるため、その全貌を提示することはここでは断念する^[1]。そこで、光源氏という人が何者であるかということの原点的な部分のみを取り出せないか、という方向で考えてみることにするが、光源氏の原点をどこにみるかは論者によって様々である。例えば、代表的な見方として、光源氏にとって最重要であった女性たち三人、母桐壺更衣―藤壺女御―紫の上という系列を見出し、そのいずれかに根源をみて、他はそこに還元されるべきものとみなす見方がある。この系列には、確かに光源氏の原点ともいえるべきものが含まれていると予感させるものがある。本稿としては、これを派生する三つの見方として対立させることよりも、共通項によって統一的に理解し得る地点を探り、その上でさらなる普遍化を試みることにしたいと思う。

桐壺更衣、藤壺、紫の上の三人の光源氏との関係における共通項として想起されるのは、三人の容姿が似ている(と光源氏が捉えていた)こと、そして三人とも光源氏より先に死んだこと、の二点であろう。ここで後者の「光源氏より先に死んだこと」について考えてみると、三人の他にも多くの人々、特に光源氏にとって親しき人々の多くがこれに当てはまるといえることが改めて確認されてくる。桐壺更衣、更衣の母君、夕顔、葵の上、桐壺院、六条御息所、藤壺、柏木、紫の上といった人々が確かに光源氏より先に死んだ。このように光源氏にとって親しき人々が光源氏に先立ってしまうということは、光源氏という存在の性格、ひいては『源氏物語』の性格を大きく特徴づけるものであると考えられる。そこで本稿では、光源氏が経験した「死」、あるい

は「死」を経験する者としての光源氏について考えてゆくことにしたいと思う。ただ、以上の程度の限定では、問題が依然として『源氏物語』『正編』の大部分にまたがることは避けられず、また長編的な構想のもとに現れる「死」は一層複雑な要素を孕むものとなってくるため、光源氏が最初に経験した三つの「死」に焦点を当てて考察を行うこととする。

一一

光源氏が経験した第一の死は、母桐壺更衣の死であった。更衣は帝の寵愛を一身に受け、それゆえに他の妃たちからの嫉妬・迫害をも一身に集めて衰弱し、弱れば弱るほどまた帝は更衣を愛する。このような循環の中で、「世になくきよら」⁽³⁾な光源氏が誕生し、その存在はこの循環に一層の拍車をかけることになった。そして更衣は病を患って、退下していた里で死んだのである。子である光源氏も喪に服するため帝のもとから退出しなければならなくなった。そのような場面である。

何ごとかあらむとも思したらず、さぶらふ人々の泣きまどひ、上も御涙の隙なく流れおはしますを、あやしと見たてまつりたまへるを。⁽⁵⁾

母更衣の死に際して、光源氏は何が起こったのかもわからず、周囲の人々や帝が泣いているのを、「あやし」と思っている。通例、この箇所には、死を理解しない光源氏の幼さや頑是なさ⁽⁶⁾が読みとられるまでであるが、それでよいだろうか。「あやし」という語は現代語に移せば、「変だ」「いつもとは違っている」「不思議だ」くらいの意味あいをもつ。「あやしと見(る)」ことは、『源氏物語』における光源氏の最初の自発的な行為でも

あり（光源氏三歳）、極めて重要な点であると考えられる。光源氏は母の死に導かれたこの最初の行為において、「あやし」という一語、これ以上に分節することの不可能な疑問の固まりになっている。この全存在の疑問という形で光源氏が捉えているものは、いわば死のわからなさである。死のわからなさとは、死が超越的契機をもつことに由来するものであると考えられる。光源氏は確かに母の死ということがわからなかったのであるが、そのわからなさとは、死に接した者が原初において必ず直面するべき死のわからなさであったと考えられる。死はその超越性ゆえに不可解さ不可思議さに満ちており、生者にとつて死はまず根源的な疑問として立ち現れてくるのである。その意味において、光源氏は死の超越性を正しく捉えていたといえる。しかも光源氏の最初の行為がそのようなものであったということは、光源氏のこれからの全ての行為に影を落とす、もつといえ、その存在自体に影を落とさずにはおかなくなるほどの重みをもつものであったと考えられるのである。⁽⁸⁾

光源氏の生はあたかも、母更衣の死と引き換えられるかのように齎されてきた。母と子となるためには、この世において一瞬でも同時に存在しなければならぬと考えられるが、それは光源氏においてはまさに一瞬だったのである。『源氏物語』において更衣と光源氏が同時に登場する場面はみられない。⁽⁹⁾そして語られているのは、光源氏の存在が、帝の更衣への寵愛を加速させ、結果更衣への迫害を加速させたということのみなのである。更衣の死は、妃たちの迫害によって、帝の寵愛によって、そして光源氏の存在によって齎されたものであった。不可避的に母の死の要因を構成してしまった、あるいはそのような形でしか母と関わりをもてなかつた光源氏の生は、常に死の影を負ったものとならざるを得ないと考えられる。⁽¹⁰⁾

光源氏が経験した第二の死は、祖母・更衣の母君の死であった。更衣の母君は、更衣の死を嘆き、更衣の父故大納言の遺志をひたすら守り通してきたことが齎した逆説を思い、そして一人残す光源氏の将来を憂いなが

ら、死んだ。母君の死は、「慰む方なく思ししづみて」、せめて更衣のいる所に訪ねてゆきたいと願っていたその「しるし」かと思われるようなものであったという。

皇子六つになりたまふ年なれば、このたびは思し知りて恋ひ泣きたまふ。⁽¹¹⁾

祖母の死に際して、光源氏は「思し知りて恋ひ泣く。「このたびは」とあることからわかるように、更衣の死の際に「あやし」と思った光源氏のその姿と対照されている。光源氏は祖母の死がわかった、祖母が死んだということがわかったのである。では、その死がわかるといのは、どのようなことなのか。死は、まず超越性ゆえの不可解さをもつものであった。光源氏は祖母の死を「恋ひ泣」いている。不可解性・超越性をもつ死を対象化して、「わかる」というとき、それはこの「恋ひ泣(く)」ことを通してのものであったと考えられる。対象化し切れぬはずの死を、「わかる」というのはどういうことなのか。引用箇所において、死に対して「思し(思ひ)知(る)」といういい方がとられていることが、極めて適切であるように思えるのは、「思ひ」という形においてしかわれわれが死を捉え得ない、そのようにしか「知り」得ないということを示唆しているからである。光源氏は二度目の死にあたって、それが死であることを理解した。だがその理解は、死が何であるかを根源的に知り得たということではない。死に接することの反復において、それが同じく死であるということを知ったということだと考えられる。

「恋ひ泣く」ということは、一般化するならば、「悲しむ(悲しぶ)」ことの一形態に含まれよう。⁽¹²⁾ただし注意したいのは、この箇所では、光源氏を主語として「悲しむ」という表現が用いられているのではないことである。この点を強くとるならば、帝や母君が更衣の死を悲しみ、帝が更衣の母君の死を悲しむといった場合と

は、死の受け止めの水準が異なっていると考えた方がよいことになる。事実、死に対して光源氏が「悲しむ」という表現は、後述する夕顔の死以降のことであると考えられる。そこでひとまず、「恋ひ泣く」と「悲しむ」との水準の相違について考えておくことにしたいと思う。

「恋ひ泣く」は、より「あやし」に近く、死への対し方としての原初性がまだ色濃く残存しているように思われる。というのは、死者を「恋（ふ）」ことは、「いない」者を「いる」ようにさせたいということに他ならず、したがって、死と生の境界を越えよう、あるいは越えさせようとすらすらする、強い願望を孕む行為だからである。これとの対比においていえば、「悲しむ」には、「いない」者は「いない」という死への「慣れ」とでもいべきもの、あるいは死者がもう戻らないことへの「諦め」が、含まれているように思われる。いいかえれば、「悲しむ」は、生死の境界の越えられなさへの諦めに基づく、生の側からする画然とした生と死の境界づけによって、死と生の隔絶を見て取るものである。ただ、やはりこの隔絶はどこまでも便宜的あるいは方法的なものたらざるを得ないという面がある。生きている側に立つ者も、死を免れることはできないからである。以上から、「悲しむ」は、死の経験の反復において、生者が生者として死に耐え、また自らが生きてゆくための、ある種の安定を齎す型を形成してさえいるものであるといえるだろう。¹⁴（死を）「悲しむ」の方が、生と対比させることで、死を「わかる」度合いが高まっているのである。そしてそこからさらに、死が生になぞらえられつつ、¹⁵「別れ」としての死という意味づけを得ることもなると考えられる。

いま「恋ひ泣く」と「悲しむ」との水準の相違をみたが、勿論、「あやし」から「恋ひ泣く」、「悲しむ」へと、死に対する「思ひ」は一筋に連なっているのだからならぬだろう。¹⁶「あやし」は「恋ひ泣く」のうち、「恋ひ泣く」は「悲しむ」のうちに、包まれゆきながら、死の経験の反復とともに、「悲しむ」の層が厚みをなし、重みを増してゆくことになるのである。

光源氏は第一・第二の死の経験からおよそ十年の後、老病に臥す大武の乳母（惟光の母）に次のように語っている。大武の乳母はいわば光源氏の育ての母である。

いはけなかりけるほどに、思ふべき人々のうち棄ててものしたまひにけるなごり、はぐくむ人あまたあるやうなりしかど、親しく思ひむつぶる筋はまたなん思ほえし。人となりて後は、限りあれば、朝夕にしも見たてまつらず、心のままにとぶらひ参づることはなけれど、なほ久しう対面せぬ時は心細くおぼゆるを、さらぬ別れはななくもがなと¹⁷なん

「さらぬ別れ」、即ち「避けられぬ別れ」はあつてほしくない、と光源氏はいう。光源氏は、余命をいくらかでも延ばそうと厄になった乳母に、長く生きてほしいと願うとともに、その死を予感しているのである。光源氏はここで、死を「避けられぬ別れ」として捉えている。「避けられぬ」という言葉には、避けたい・別れたくないという願望が、すべからず挫折すべき願望として受け止められることによつて、逆に一層強く願うほかなくなる、という光源氏の「思ひ」のたどる筋道が現れているといえるだろう。光源氏の対象への「思ひ」としては、これは「避けられぬ」という諦めが含まれている点において、「悲しむ」の構造に近似してきていることがわかる。また、「なくもがな」（あつてほしくない）という点において、「恋ふ」の構造も強く残存していることがわかる。乳母の死の予感において、「恋ふ」ことの反復が予感され、また「恋ふ」ことが諦めを伴いながら「悲しむ」へと移行するだろうことが予感されているのである。

引用箇所の冒頭では、光源氏の経験した桐壺更衣・更衣の母君の死が死別として、光源氏と大弐の乳母との関わりに接続されつつ、語られている。「幼い頃に、私を思うべき人々が私を捨てていってしまったことが尾をひいており、育てる人はたくさんいたようだけれど、親しく思い睦ぶ筋はあなたを措いて他にいないように思っています。…」。母・祖母は死ぬことによって自分を捨ててしまった、自分は母・祖母に先立たれ捨てられてしまった者である、そのように光源氏は自己を捉えている。即ち、生きている光源氏にとっての死別の質は、「捨てられた」ということなのである。先にみたように、大きく捉えるならば、光源氏の死の捉え方は「悲しむ」の側に比重を移しつつある。しかしそれでもやはり、死者を「恋ふ」ことが中核的な位置を占めていることが、「捨てられた」という捉え方からはつきりとわかるだろう。「捨てられていない」状況というものを想定してみれば、母・祖母が死なないか、自身がともに死ぬか、のいずれかであり、しかも両者ともに実現不可能なことであると考えられる。⁽¹⁸⁾光源氏においては、生者としてあることが、すでに捨てられ取り残されていることであるのであって、その意味では死んだ母および祖母を「恋ふ」ほかない形における、光源氏の死への親近性が認められるだろう。最も親しく接してきた大弐の乳母の死を予感する今、また捨てられてしまふのではないかという思いが光源氏をよぎるだろうことは想像に難くない。

光源氏は乳母が尼姿であることを捕らえて、「かく世を離るるさまにもしたまへば、いとあはれに口惜しうなん。命長くて、なほ位高くなども見なしたまへ。」⁽¹⁹⁾ともいつている。乳母が「世を離るる」姿であること、即ち光源氏の属する生者の「世」から離脱し、死の世界へゆくことに備える姿であることが残念だというのである。「長生きをして、私がつと昇進する姿なども御覧になつて下さい」と光源氏は祈るようにいう。光源氏の願望においては、自らの乳母に対するあるべきありようは、成人前のように乳母の姿を「朝夕」に「見」、また「心のままにとぶらひ参る」ことなのである。なかなか面会することも叶わぬいま、「久しう対面せぬ時は

心細くおほゆる」と光源氏はいう。「心細し」ということは、大式の乳母にも自分が捨てられるのではないか、再び自分は一人取り残されてしまうのではないか、という不安を表していると考えられる。母代わりであった大式の乳母こそが、唯一の、自分を「思ふべき」人であるのに、その乳母が尼姿となりいずれ亡くなることを自ら予告しているのであるから、自分が再び取り残されることが、すでに確定していると告げられているようなものなのである。光源氏は、終生変わらぬ、否、それを越えるいわば永遠の間柄を求めている。永遠に自分を「思ふ」人がいてこそ、自分の存在が成り立つと光源氏は考えているのである。永遠に、というのがいい過ぎならば、少なくとも、光源氏自身が生きているよりも長い間、自分を「思ふ」人の存在を求めていることになろう。

では、自分を「思ふ」人の存在が、自分がこの世に存在することを証明する（と考える）ということとは、どのようなことなのだろうか。光源氏の「心細し」ということを、より具体的に捉えるために、この問題を考えることにしたい。すでにみたように、光源氏は母・祖母の死を経験した。内的には、それを死別として、しかも自分が「捨てられた」という形における死別として、光源氏は捉えていた。母・祖母の死は、光源氏の内なるものとして、そのような「思ひ」を齎したが、それをいわば外的に補強してしまうものをも、同時に齎していたと考えられる。それは、母・祖母の死が光源氏の臣籍降下（皇族から源氏となったこと）の間接的な原因を作っているということである。臣籍降下は、光源氏が身分として本来もつはずであった、この世への帰属意識のあり方としての皇統から、光源氏を切断するものという面があっただろう。臣籍降下は、後見者なき光源氏の将来を思う父帝の判断においてなされたものであったが、光源氏としては、あるべきあり方としての皇統から離脱させられ、より確かな存立基盤を失うという面をもっていただろう。思いやり、あるいは直接的な愛としては、父帝とより深くつながり得るのだとしても、身分的な意味においては、父帝からも「捨てられた」ことになってしまうのではないか、と考えられるのである。ただこのことは、実際に帝が光源氏を見捨てたと

いうわけでもなく、明示的なしかたにおいて現れる事柄ではないため、極めてみえにくいことであるが、光源氏にとつて根本的だと考えられる「捨てられた」ということの外延を見定めるためには、こうした身分的な条件にまで考察を及ぼすことが必要だと思われる。

少し遡つて考えよう。後見者のないこと、即ち母も祖母もなく、また祖父が（有力者として）生きていないことによつて、光源氏の皇族としての将来は完全に閉ざされてしまつていた。後見者のないことは、すでに桐壺更衣において、決定的な負の威力をもち、更衣を死に至らしめすらしたものであつた。光源氏の場合、第一皇子を圧倒する資質をもつていたがために、いよいよ後見者なきことの負の威力が危険度を増すこととなり、父帝は光源氏に源氏姓を与え臣籍に下す決断をしたのであつた。

無品親王の外戚の寄せなきにては漂はさじ、わが御世もいと定めなきを、ただ人にて朝廷の御後見をするなむ行く先も頼もしげなめることと思し定めて、いよいよ道々の才を習はさせたまふ。⁽²²⁾

引用箇所、父帝は光源氏の資質を見抜きつつ、行く行くは臣下として国家の後見者にするという方向に、光源氏の活路を見出そうとしている。後見者の庇護なき、位階すらない親王として光源氏を「漂は」せまいとする帝の策は、最終的には成功したといえよう。⁽²³⁾だが、そこに至る道程は、どのようなものであつたか。政治的な成功に至るまでの光源氏の軌跡は、あくまで活路を通つたものであつて、常に死路と裏腹の、まさに帝が回避しようとした、「漂（ふ）」とでもいうほかないありようをもつていたのではなかつたらうか。⁽²⁴⁾後のことであるが、光源氏はしばしば、自身の浮いたような感じを表明している。「浮いている」ということは、「漂ふ」側の主体的な捉え方として、この世に根がない、あるいは立脚すべき拠り所がないということであるから、身分

的な事柄と無関係とはいえない。また、「捨てられた」ということから、「浮いている」ということを捉え返してみるならば、「捨てられた」ということが徹底されるとき、「浮いている」という感じが出てくるのではないかと考えられる。この世に幾重かに張り巡らされた、「捨てられていない」ことの綱の目のどこかに引つ掛かることによつて、通常、人は生きている・生の存立を確保していると考えられ、光源氏の場合でいえば、その重要な綱目が死によつて綻んだとき、「捨てられた」と感じるのだろう。「捨てられた」ということが重なつて、光源氏をこの世につなぐ糸は殆どなくなつてしまつている。その状態が、「浮いている」ということではないかと考えられる。つなぐ糸が完全に断られたとき、光源氏は（あるいは人というものは）、「浮」きながらこの世に存在することをやめ、どこかに飛んでいってしまうのではないかとも思われる。この光源氏の「捨てられた」及び「浮いている」という感覚は、実に両者とも母・祖母等の死から齎されるものであつた。

生まれながらに圧倒的な個である光源氏は、死に囲まれつつ「捨てられた」と感じ、また皇族から切断されたことも含めてこの世から「浮いている」と後に感じるようになる。このような光源氏が、己れの存在をこの世につなぐ拠り所を見ようとしたのが、「思ひ」の場面であつたと考えられる。光源氏の「思ひ」の原型は、帝から受けた「思ひ」と藤壺への「思ひ」であつたと思われるが、それが純化されるのは成人を契機として、光源氏の唯一の居場所であつた帝及び藤壺との曖昧な一体感から疎外されて以後のことである。「思ひ」の場面における否定が、「隔てられた」という感覚を生じさせ、光源氏における「思ひ」への自覚形態を齎したのだと考えられる。以後、光源氏は「隔て」を克服することに異常なまでの執念を燃やしてゆくことになる。

端的にいえば、光源氏にとつて、「思ひ」というもの以外に拠り所たり得るものはなかつたのではないか。大弐の乳母のように、心から自分を「思ふ」人の存在のみが、自分がこの世に存在することを確かなものとして、即ち意義づけ根拠づけている。「命長くて、なほ位高くなども見なしたまへ。」という光源氏の願いは、

偽りの混じりようなど決してない、真実の祈りであつたと考えられる。光源氏が考えるように、自分を「思ふ」人の存在が自分の存在の拠り所たり得るのだとすれば、自分が人を「思ふ」ことが人の存在の拠り所たり得るということもあるのではないか。そう考えてもよいのではないか。このように「思ふ」ことの相互性が成り立ち得るのであれば、拠り所の相互付与がなされ得る、一つの理想世界が立ち上がってくることもなるはずだと考えられる。⁽²⁷⁾ただ、「思ふ」という直接的な愛だけに根拠づけられる世界は極めて脆いものでもあると考えられる。直接的な愛は失われやすいという性質をもつ。個と個との間における直接的な愛というものは、よくて仮に「思ひ」の内実の永続性が確保され得たとしても、個が個である限りどちらかが先に確実に死んでしまふことによつて、消滅し得るからである。光源氏が「心細し」と思つたとき、乳母の死による「思ひ」合ふ二人の間柄の消滅を予感していたことは間違いないと考えられる。以上のような、光源氏の「思ひ」における理想と現実とは、次に扱う夕顔の死の経験において集約的に現れてきていると思われる。

四

光源氏が経験した第三の死は、夕顔の死であつた。光源氏は大弐の乳母を見舞う途上において、夕顔と出会う。夕顔は事情により身を潜めて暮らしていたが、ふとしたことから光源氏に歌を読み掛けて、光源氏の興味を引くことになる。互いに素性を隠したままの関わりにおいて、光源氏は「あやしきまで」⁽²⁸⁾に夕顔を思い、どこに心惹かれるのか自分自身でもわからぬまま、「いかなる契りにはありけん」と前世からの因縁を考えるほどとなつた。「かりそめの隠れ処」⁽²⁹⁾からいつ消えてしまふともわからなく思われる夕顔を、自邸に引き取りたいと光源氏は考える。

何処とも知らぬ不気味な「なにがしの院」⁽³¹⁾に連れ出された夕顔は、「…心細く」といい「もの恐ろしうすげ

に思」⁽³²⁾うが、「思ひの外にあやしき心地はしながら、よろづの嘆き忘れてすこしうちとけゆく気色」⁽³³⁾を見せた。「うちとくる心ばへ」⁽³⁴⁾をもつ夕顔を「なほうちとけて見」たい⁽³⁵⁾という当初のねらいを、ほぼ実現させた光源氏自身も、「げに、うちとけたまへるさま世になく、所がらまいてゆゆしきまで見えたまふ」⁽³⁷⁾といわれる姿を見せていた。

二人の間には「思ふ」ことの相互性が、内実としては成り立っているように光源氏には思われた。光源氏における「思ふ」ことの相互性は、具体的には「見る」ことの相互性として捉えられている。それは、「見る人」としての自己規定と、夕顔に歌を読み掛けられたことを「見えしえ」⁽⁴⁰⁾（見られた縁）と捉えていることに、端的に表れている。いわば奇跡のようなこの関係を光源氏は永続的なものにしたいたいと思つたのだが、それが叶うことはなかつた。夕顔は光源氏の目の前で、物の怪に取り殺されてしまったのである。全く予期せぬことであつた。

この夕顔の死の経験は、光源氏の死の経験において決定的なものであつたと考えられる。この経験に際し光源氏が抱いた感情は、深く激しかつた。そこにはこれまで検討してきた死に対する感情のおよそ全てが含まれ、またそれを越える新たな次元のものもあつたといえる。光源氏のこの感情の起伏の全過程をたどることはここでは不可能だと思われるので、光源氏の感情表現の主だつたものを列挙し、新たな要素について検討することにする。

夕顔が「なよなよとして、我にもあらぬさま」となつてしまつたとき、光源氏は「いといたく若びたる人にて、物にけどられぬるなめりと、せむ方なき心地」⁽⁴¹⁾がした。夕顔が「ただ冷えに冷え入りて、息はとく絶えはて」⁽⁴²⁾てしまつたとき、光源氏は「言はむ方なし。」⁽⁴³⁾と思つた。夕顔が「言ふかひなくなりぬる」とき、光源氏は「やる方なくて、つと抱きて、『あが君、生き出でたまへ、いとみじき目な見せたまひそ』とのたま」⁽⁴³⁾つた。以上のように、自分の目の前でみるうちに夕顔を奪つてゆく死というもの、超越的な絶大な力をもつ死というものに対しての生者の側の対応の無力さが「く方なし」という言葉の繰り返しによつて語られていると考えられる。ただし、無力さといつても、いまだ諦めにおけるそれなのではなく、どこまでも抵抗における

それであることに注意したい。「あが君、生き出でたまへ」といつていること、あるいはその直後に「さりともいたづらになりはてたまはじ⁽⁴⁴⁾」と思ひ直していることなど、光源氏は夕顔を死から取り返すべく死と争っているかのようである。死につつある夕顔の死に対して抵抗することは、生死の境界を越えて死の側へゆこうとする夕顔を、この生の世界の側へ何とか引きずりどめようとするのであるから、いわば「恋ふ」ことの前段階的ともいふべき構造をもっていることになる。「う方なし」という死に対する生者の側の対応の無力さ、どうしようもなきが自分の感情にはね返されて捉えられるとき、次のようないい方となってくる。「胸はふたがりて、この人を空しくしなしてんことのいみじく思さるるに添へて、おほかたのむくむくしき譬へん方なし⁽⁴⁵⁾。」「などてかくはかなき宿は取りつるぞと、くやしさもやらん方なし。」「我ひとりさかしき人にて、思しやる方ぞなきや⁽⁴⁷⁾」。無力さが自分の限界として受け入れられるとき、死というものがそのどうしようもなさにおいて受け入れられてくることになるのである。光源氏は悲しんで泣く。

夕顔の髪が、遺体をくるむ上蓆からこぼれ出ているのを見て、光源氏は「目くれまどひてあさましう悲しと思せば、なりはてんさまを見む⁽⁴⁸⁾」と思う。遺体あるいは死体というものは、非在なのに存在しているという点で中間的であり境界的なものである。遺体あるいは死体の存在は、死と生の狭間における曖昧さを齎してくる。この身とこの身として関わってきた間柄が、この身とあの身になってしまいつつある。そして、あの身はあの身ですらなくなつてゆくだろう。この身としての光源氏は、夕顔の「なりはてんさまを見」よう、即ち見届けようとする。生者の側からなし得ることはそれ以外になく、また光源氏にとっての死の受け入れと諦めとにつながる行為であると考えられる。しかし、人目を避けて自邸に戻ることを促され、「ものもおほえたまはず、我がのさまにて⁽⁴⁹⁾」帰邸した光源氏は、後悔するのである。

などで乗り添ひて行かざりつらん、生きかへりたらん時いかなる心地せん、見棄てて行きあかれにけりとつらくや思はむ、と心まどひの中にも思ほすに、御胸せき上ぐる心地したまふ。御頭も痛く、身も熱き心地して、いと苦しくまどはれたまへば、かくはかなくて我もいたづらになりぬるなめりと思す。……苦しくて、いと心細く思さるる⁵⁰

「なぜ一緒に乗って行かなかつたのだろう、もし生き返ったような時にはどんな気持ちがあるだろう、私を見捨ててどこかに行ってしまったと耐え難く思うのではないか」。夕顔が「捨てられた」と思うような事態をどうしても回避したいと光源氏は思う。ここで、光源氏は「いと心細く」思っている。その内容として、夕顔の死ということ、夕顔が生き返ったとき「捨てられた」と思うだろうこと、またそう思わせたくないこと、そして自分の心身の異常から自分も死に至るのではないかと思っていること、がある。この「心細し」には、本稿で論じてきた全ての感情が含まれてくるように思われる。さらにここで、「心細し」に自己の死の予感が含まれてきていることは重要である。先に夕顔が「心細く」といったときに、すでにそこには自己の死の予感が含まれていた。「山の端の心もしらでゆく月はのそらにて影や絶えなむ／心細く」とは、⁵¹誰とも素性を明かさぬ光源氏（山の端）が何を考えているかもわからないままについてゆく私（月）は、宙に浮いたまま消えてしまいかもしれない、この不安定な状態のまま死んでしまいかもしれない、ということを意味している。光源氏はその歌を聞いたときは軽く捉えていたのだが、夕顔の死を経験した今となって、夕顔のこの歌の意味、即ち「心細し」という思いを追体験しているのである。光源氏が追体験し得るのは、この「心細し」という感情が、大弐の乳母の箇所でもみたように、夕顔と出会う以前から光源氏の内にあったものであるからだと考えられる。本稿では触れることすらできなかったが、「心細し」とは、実は桐壺更衣、藤壺女御の根本感情でも

あつたものなのである。また、光源氏が興味をもつ全ての女も「心細し」という根本感情をもっていることが確認できる。その意味では、「心細し」とは、『源氏物語』における最大のキーワードの一つたり得るものである。いずれにせよ、ここに至つて後見者の非在・後見者の死に取り囲まれた者をもつ、他者の死の経験とそれに対する感情の全て、即ち本稿で論じてきた「あやし」「恋ふ」「悲しむ」「捨てられた」「浮いている」「隔てられた」という感情の全てが、自己の死の予感という要素までも合わせつつ、「心細し」に収斂してくと考えられるのである。

光源氏の自己の死の予感は、この前後で何度も繰り返される。特に、どうしてももう一度夕顔の姿を見たい・見届けたいという夕顔への最後の願いを果たしてから、一層甚だしくなってくる。確認のため、最後の対面の箇所から引いておくことにしたい。

恐ろしきけもおぼえず、いとらうたげなるさまして、まだいささか変りたるところなし。手をとらへて、「我にいま一たび声をだに聞かせたまへ。いかなる昔の契りにかありけん、しばしのほどに心を尽くしてあはれに思ほえしを、うち棄ててまどはしたまふがいみじきこと」と、声を惜しまず泣きたまふこと限りなし。⁽⁵²⁾

遺体あるいは死体としての夕顔と最後の対面を果たす前には、「なほ悲しさのやる方なく」といわれたように、夕顔の死がまだ曖昧さを残すものであることからくるやり場のなさがあつた。最後の対面を果たし葬儀を終えて、夕顔の死が確定したものととして受け入れられることによって、光源氏の〈心細さ〉は自己の死の予感へとその方向を変えるのである。「かく言ふわが身こそは生きとまるまじき心地すれ」「いづこともなくまどふ心地したまふ」「かかる道の空にてはぶれぬべきにやあらん、さらにえ行き着くまじき心地なんする」と光源氏は

感じている。この光源氏の自己の死の予感、夕顔の死によって齎されたものである。光源氏の〈心細さ〉は、夕顔の〈心細さ〉を通して、あるいは夕顔の〈心細さ〉の反復として露わになってきている。光源氏はこれからも、他の死の経験によって自己の死の予感を抱き、また自己の死の予感を潜在させながら他の死に出会うということを繰り返す。いいかえれば、光源氏は〈心細さ〉をもつ者に出会い、また別れることによって、自己の〈心細さ〉を露わにし増幅させるということを、その人生において幾度となく繰り返してゆくのである。したがってさらにいえば、〈心細さ〉には、反復における他の死の予感・死別の予感も含まれてくるはずであると考えられる。

むすび

光源氏は死に取り囲まれている。第三の夕顔の死は光源氏が呼び込んだものであることは疑えないし、第一・第二の母・祖母の死も光源氏が呼び込んだものと考えることすら（前世を想定する宿世的な世界観のもとでは）可能なのである。死に取り囲まれることは、光源氏の宿世とでもいうほかない事柄であると考えられる。光源氏は、死に取り囲まれ、死んでゆく側が全体となつてゆく、いわば死の全体性とでもいうべきものを背負っていることになるのである。失われた間柄（という間柄）が光源氏において全体をなしてゆく。このことは第一・第二の死を経て第三の夕顔の死で確定した感がある。前世からの因縁を感じるほどの人が目の前で死んでゆくということが、光源氏の宿世を端的に物語っていると考えられるからである。光源氏は死の全体性を背負いつつ、生の全体性の代表者のようになつてゆく。これは、光源氏が〈心細さ〉の克服をひたすら追求することから齎された結果であると考えられる。死に取り囲まれた、最大の〈心細さ〉をもつ光源氏であるからこそ、最大の後見者にもなることができるのである。この意味で、光源氏は死と生をつなぐ存在であつたといえるだろう。

注

- (1) 『源氏物語』の全体構造の最小単位の抉り出しを、「桐壺」巻と「若紫」巻の叙述に即して試みたことがある。『源氏物語』の倫理想―光源氏像に即して―日本倫理学会第五一回大会、東京大学キャンパス第二会場、二〇〇〇年一〇月一四日（『日本倫理学会大会報告集』二〇〇〇年号に要旨を載せる）。
- (2) これは異なり、光源氏の子を生んだ女君の系列を重視し、生者の側に完全に重点を置こうとする解釈もある。阿部秋生『源氏物語研究序説』（東京大学出版会、一九六三年）参照。
- (3) 『源氏物語』の引用は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『源氏物語①』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九四年）に拠る。注で示す頁数は本書のものである。
- (4) 「光源氏」という呼称は固有名詞ではなく、引用箇所ではまだ「源氏」になっていないなどの問題があるが、本稿では便宜的にこの呼称で一貫させている。
- (5) 「桐壺」巻、二四頁。
- (6) 新日本古典文学大系（岩波書店）の脚注。
- (7) 新潮日本古典集成（新潮社）の頭注、新編日本古典文学全集の頭注。
- (8) 例えば、光源氏の異常なまでの聡明さという問題も、この死の影と切り離して考えることはできないものと思われる。
- (9) あえて探しても、「世になくきよらなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。」（二八頁）の「生（む）」の部分のみであろう。母更衣と光源氏との関わりについては表現しないということが徹底されているとみられる。藤井貞和が更衣の絶唱に光源氏を託そうとする遺志を読みとっているが、それは更衣と光源氏との関係の非表現を裏側から捉えようとした解釈であると考ええる。藤井貞和「ふたたび『桐壺の巻』について」（『源氏物語入門』講談社学術文庫、一九九六年）参照。

(10) 非在の母というモチーフは日本思想の根本問題の一つと考えられる。例えば、『古事記』におけるスサノオは、母イザナミの死の一因となったとまではいえないにしても、その存在は母の死の影を確実に負っているといえる。この点については、菅野覚明『神道の逆襲』第九章参照（講談社現代新書、二〇〇一年）。

(11) 「桐壺」巻、三八頁。

(12) 相良亨『日本人の死生観』（ベリかん社、一九八四年）を全体として参照してほしい。

(13) 死と生の境界という問題については、拙稿「死と生の祀り―イザナキ・イザナミ神話における生命思想―」（『季刊日本思想史』六二号、ベリかん社、二〇〇二年）で考察したことがある。

(14) 本稿では、本居宣長の悲しさについての議論を受けつつも、仏教を排除しないような視点、また観照的でない悲しさという視点を、『源氏物語』論として探ろうとすること、差別化を図っている。

(15) 「別れ」というものが、根源的には死別であるかもしれない、もしそうだとすれば、「死が生になぞらえられる」といういい方は本来成り立たなくなり、「生が死になぞらえられる」といわなければならぬ。本文では生者の側に立つ光源氏の立場から述べている。

(16) 「泣く」の部分は連続面を示すものと考えておくことにする。

(17) 「夕顔」巻、一三九頁。

(18) 他の可能性は、（浄土における）絶対的合一しかなく、ここに光源氏の道心の原点があると考ええる。

(19) 「夕顔」巻、一三八頁。

(20) 次の引用箇所で、「わが御世もいと定めなき」と帝ですら帝位あるいは生そのものに不確定感をもっていることを重視すれば、国家の根幹からして不安定であることになって、光源氏だけの問題ではないとも考えられる。光源氏の位置はあくまで帝の「私物」（『桐壺』巻、一九頁）なのであり、帝の庇護も限りあるものだということになる。またこの不確定感から、更衣への恋に走る帝というありようも、あり得ることとして理解できるようになると思われる。

(21) 「見る」という観点から追跡すると、帝と光源氏とのつながりの深さが明らかとなってくる。注（1）発表で述べた。

(22) 「桐壺」巻、四一頁。

- (23) 「藤裏葉」巻で光源氏は准太上天皇となる。
- (24) この最たるものとして、後の須磨流謫があと考える。
- (25) 「浮いている」ということについて、本稿とはやや視角を異にするが、思想史の立場から『源氏物語』の女君の場合に即して論じたものとして、佐藤勢紀子『宿世の思想―源氏物語の女性たち―』（ペリカン社、一九九五）がある。
- (26) 「隔てられた」ということが、光源氏を「女」に固執させる一因ではないかと考えられる。
- (27) この延長上に、後の六条院構想があると考えられる。
- (28) 「夕顔」巻（以下同じ）、一五二頁。
- (29) 一五四頁。
- (30) 一五四頁。
- (31) 一五九頁。
- (32) 一六〇頁。
- (33) 一六三頁。
- (34) 一五八頁。
- (35) 一五七頁。
- (36) 「名」という一点以外についてである。「なごりなくなりたる御ありさまにて、なほ心の中の隔て残したまへるなむつらき」と光源氏は述べている（一六三頁）。
- (37) 一六二頁。
- (38) 注(36) 参照。
- (39) 一六三頁。光源氏が見る存在であるという点については、注(1) 発表で述べた。
- (40) 一六一頁。
- (41) 一六六頁。
- (42) 一六七頁。
- (43) 一六七頁。

- (44) 一六八頁。
- (45) 一六八頁。
- (46) 一六九頁。
- (47) 一六九頁。
- (48) 一七二頁。
- (49) 一七二、三頁。
- (50) 一七三頁。
- (51) 一六〇頁。
- (52) 一七九頁。
- (53) 一七八頁。
- (54) 一八〇頁。

※本稿は科学研究費補助金による研究成果の一部である。

(よしだ・まさき 日本学術振興会特別研究員・都留文科大非常勤講師)

“The Tale of Genji” from a Thanatological Point of View

Masaki Yoshida

“The Tale of Genji” can be understood from a thanatological point of view. The tale contains a number of deaths, and Hikaru-Genji is surrounded with them all the time. This article pays attention to three deaths he experiences while he is young: the deaths of his mother Kiritsubo, his grandmother and his lover Yugao. The three deaths have great influence on Hikaru-Genji.

Hikaru-Genji has such feelings that man shall have when he encounters death. He feels *strange* when he meets with the first death. He *misses* the dead when he meets with the second. He is *sad* when he meets with the third. Experiencing the repeated deaths, Hikaru-Genji gets to foresee his own death, but resists the deaths of his families and lovers to the last, in the hope of not losing his relationship with them. In the wake of the deaths, he feels *abandoned*, *floating* and *distanced*. These feelings are united into one feeling, “心細し”, *helplessness* or *loneliness* (“心” means heart, and “細し” means thin in a literal sense).

This article reconsiders, from a thanatological perspective, the meaning of “心細し” and other feelings that Hikaru-Genji has when he encounters death, and concludes that it is Hikaru-Genji’s destiny to be surrounded with death, and that he encounters other’s death with a subconscious awareness of his own.